主婦会活動の鏡に
見つめ直そう〝姿見〟欄

主婦会事務局長　平川弘子

私たちの機関紙「みいけ」に、主婦の生活記録・雑感や意見交流の場としての「姿見」欄があります。現在では主婦会が、毎月指導部のもち回りで原稿を寄せ合っている「姿見」ですが、ともすると書くことへの努力が日常生活の苦労に流されがちで、とかく自分の姿をみる目がくもるように感じられます。

つい先ごろ「みいけ」の歴史をさかのぼり、諸先輩の生活記録や意見にふれることができました。特に「姿見」欄が誕生した折の苦労話を知ることができましたが、皆さんとともに理解を深め、今後の活動に生かす糧にしたいと考える次第です。

昭和三十一年七月二十二日の「みいけ」に、当時編集部長だった平島敏治さんは次のように記されています。

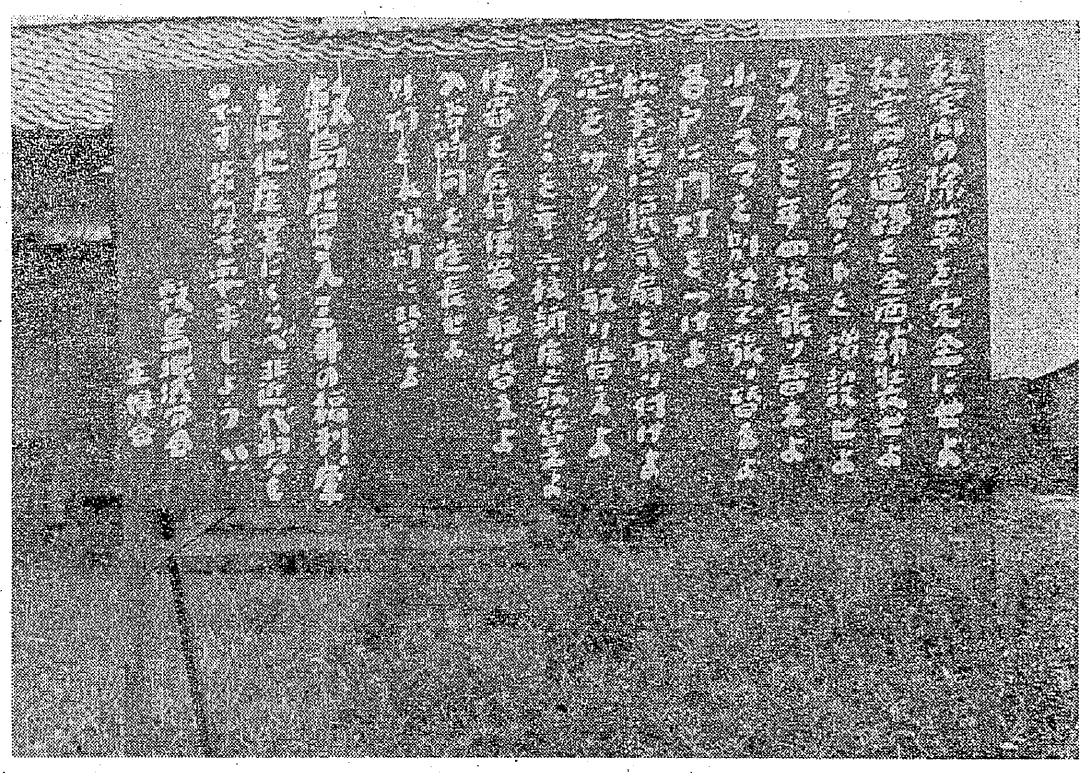
「主婦会の福川文枝文教部長さんから、『みいけ』に主婦の立場からお互いにいろいろと意見を交流する場所を考えてもらいたい、と相談があった。他ならぬ主婦会からの相談なので、これはいっちょうよか考えを出して、商業新聞の『紅皿』『ひととき』欄にまけないようなものを、と思った。

組合の機関紙は、組合員はもちろん主婦会の方々も読んでもらいたいために編集しているので、主婦の意見の交流の場だからと言って男性を無視することもできず、『どんこの瞳』『もぐらの夜』と男性むきを考えたが、あまりパッとしない。『紅唇』『女のひろば』『女性の夢』『女性解放』、ただでさえ暑くてたまらないのにこれではなおさら暑さを増す。

スマートでみんなが好むもの、なかなか虫のいい考えであるが名案が浮かばない。かくなる上は最後の手段と、女性に関する書物を片っぱしから借りて読んだ。『スタイルブック』『暮らしの手帖』『装苑』『婦人雑誌を目の色かえてみているので同僚が、『オイッ、頭を冷して鏡でも見らんか』と大声でどなった。—中略—正直に頭を冷して鏡を見ることにした。

鏡を見ているうちに、そうだこれだ、『鏡だ』。鏡こそ人の姿を正しく写してくれる。心に曇りがある時は鏡を正視することができない。—中略—昔から『姿見』と言う言葉があるので辞書を引いたら、全身を写す大きな鏡と訳してある。主婦の皆さん、人生航路の船出に花嫁衣装を姿見に写した感激を再び、『みいけ』の『姿見』に全員が再現して下さい」。このようにして誕生した『姿見』欄であることを肝に銘じ、つね日頃感じていることを、率直に記すことにより、私たちが歩いてきた主婦会運動をさらに見つめなおす意義が生まれてくると思います。

今私たちの身のまわりでは、くらしをおびやかす一般消費税導入の動きや民主主義を否定し戦時体制をとるといわれる有事立法等の政治の反動化が露骨化してきました。その動きに歯止めをかけるために、諸活動を強めていかねばなりません。『姿見』欄の見なおしをする中から、主婦会運動への関心を高め、統一自治体選挙の勝利へむけてともに頑張ってまいりましょう。



ここは荒尾市緑ケ丘敷島町。その一隅に、地域分会の福利・厚生の改善要求をアピールする立看板が建つている。闘いは、ここから燃え始めるのだ。

訃報

十二月九日（昨年末のこと）早朝の四時十分、けたたましい電話のベルで深い眠りをさまされた。主人の声にただならぬ事態がおきたことをさっして、床の中から飛び出した。近くにお住みになっている西田政務さんが、坑内でお仕事中倒れられたとのことで、ひとことふたこと要点だけ聞くと、天領病院（三井鉱営）へいそいだ。

見ると、昨日まで元気だった人が、深く切り裂かれた喉にクダをいれられ、苦しそうな息づかいだけが室の外まで聞こえていた。

死線をさまよわれること五日間。家族の人にも、苦しみや楽しさをわかち合ってきた仲間にもひとことの言葉も残さず、永眠された西田さん。

私は寝顔に、永い闘いと生活苦、病気に負けず今日まで生きて来た人とは思えぬ、安らかな死顔を見る気がした。でもご本人は、残されたご家族のことがどんなに気がかりだったことでしょう。せめてひとこと、何かいってほしかったのに、残念でならなかった。

初七日の日、家族の方といっしょに鉱長室や人事へ挨拶にいった。血も涙もない、通りいっぺんな慰めの言葉をうけた。後すぐこんどは指導部へ行き、職場の皆さんにお会いした。そこで他人の私でさえ気づいたことは、共にたすけ合い、共に闘った仲間の死をおしむ思いをのぞかせた、何ともいえぬ組合員仲間の方々の無言の顔に胸がつまったのだった。

また、指導部長より、仲間が残された家族をはげますためにカンパの呼びかけをなされていることを聞かされ、ともすれば今の組合、主婦会の運動に疑問を抱いていた自分が恥ずかしくてたまらない気持だった。今日特に「姿見」欄が誕生した折の苦労話を知ることができました。特に三池労組と三池主婦会の団結の大きさを痛感したことはなかった。残された家族の人々を、仲間として今まで以上にあたたかくつつんで下さるよう、組合員・主婦会員皆様に心からお願い申し上げる。

教えられたこと

主婦会三川指導部　一主婦

仲間——西田さんが安らかにお眠り下さるよう、心からお祈り致します。

×

右の文中にある西田政務さんは三川鉱の坑内機械工として長く働いてこられましたが、昨年十二月八日午後十一時四十分ごろ坑底で仕事中に倒れ、同月十三日懸命な手当の甲斐もなく、入院先の天領病院で永眠されたものです。行年四十六歳でした。遺族に妻の一子さん（四十三歳）に子ども二人、実父の勝利さん（七十五歳）があります。長溝社宅で、さびしく暮らしておいでです。はげましていきましょう。なお、ご希望により匿名にしました。

さて主婦会の皆さん、新しい年です。しかも重大な年です。心ひきしめて闘わねばなりませんが、同時にこの欄へもご投稿をお願いいたします。

——編集部

年に一度の、三池主婦会定期大会

きまった——特定休日

会社との交渉で、きたる四月一日から一年間の特定休日がきまりましたから、次にお知らせします。活用してください。

×

四月三十日（月）、五月五日（土。子どもの日）、六月十三日（月。なお十四—十六日は特殊休日）、九月十五日（土。敬老の日）、十月六日（土）、同二十日（土）、十一月三日（土。文化の日）十二月三十一日（月。なお明けて一～三日は特殊休日）、そして一月四日（金）、二月十一日（月。建国記念日）、三月十七日（月）。

芸園

シャクナゲの思い出

三川指導部　田上勇

ある時シャクナゲを取りに行こうということになり、朝早くからバイク四台で五木（熊本県下）方面に出かけた。

着くと、ウイスキーと罐ビールをぶら下げて土地の人に案内を乞う。

車で二時間。さらに山輿に向けて歩くこの二時間。やっとの思いで着いたら、あるわあるわ。

最初小さい物を取っていたが、やがて大きな奴に仕かかる。ツツジ科なので、中切りしても芽ぶくだろうと思って、株のよい物を選もつけず切り込んでしまった。

高さ二十メートルもあろう断崖から落ちそうになること二度三度。それでもかなり取れたので腰を上げたが、車まで運ぶのが大変。

案内の人に礼を言い、いいムシロに包み、バイク四台に満載。熊本市内をぶっとばし、家族が心配する頃帰宅。

翌日、切り込んだ枝ぶりの良いのを四名で取り、あとは会員に約二百三十本。結果は小さい物をもらった人が十数年たった今も愛用しており、大きいが切り込んだのは枯れてしまった。骨折り損のくたびれもうけとはこのことだが、後でシャクナゲは盗品とわかれば一本に五千円の罰金と知って、ゾッとする思いだったが……。

×

右の田上さんの手記は、新年特集号の積み残しの部です。悪しからず……。

編集者から

あけましておめでとうございます。

主婦の皆さんには、昨年本紙は大変お力添えをいただきました。家事とお仕事のはさみうちのなかで、おいそがしいなかからたくさんのご投稿をいただいたことを心から感謝します。

今年は重大な年になりそうですから、昨年にもましてお力添えくださるよう、お願いいたすしだいです。

（K記）